
時計と鎖のお話

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時計と鎖のお話

【Nコード】

N5933U

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

時計屋の懐中時計と鎖。彼等は買われていつて何処に行きつくのか。アンデルセンの童話等をイメージして書かせてもらいました。

第一章

時計と鎖のお話

懐中時計はです。いつも一緒にいる鎖とこんなことを話していました。

今二人はお店のショーウィンドウの中にいます。まだ誰にも売られていないのです。

そこで街行く人達を見ながら。懐中時計は言いました。

「ねえ鎖君」

「何、時計君」

「僕達どんな人を買ってもらえるのかな」

こつ鎖に尋ねるのでした。

「一体どんな人にな」

「ううん、どんな人だろうね」

鎖は傾げる様な調子で時計に言葉を返しました。

「わからないね」

「わからないんだ」

「いい人だったらいいけれどね」

けれどです。鎖はこつ時計に言いました。

「僕達を丁寧に扱ってくれる人だったらね」

「いいけれどね」

「どうなるかなあ」

彼等は期待しながらお話をしています。

「どんな人が買ってくれるか」

「楽しみだね」

そんなお話をしているうちにです。ある日。

お店に恰幅のいい立派な外見の男の人が来ました。ぴんと伸ばした口髭が目立ちます。その人がお店に来てなのです。

そのうえで。店長さんに言いました。

「あのショーウィンドウにある懐中時計だけれど」

「はい、あの時計ですね」

「買いたい。いいかな」

「こう店長さんにお話するのですでした。」

「あの鎖と一緒にね」

「わかりました。それでは」

「店長さんは快く頷いてでした。そうして。」

時計と鎖はその男の人に買われました。彼等はすぐに男の人のコートのポケットに入れられました。そしてそのポケットの中で。

「彼等はです。お話するのですでした。」

「やっと買ってもらったね」

「そうだね」

「まずはそのことを喜んでいます。品物は買われることが仕事ですから。」

「さて、これからだけれど」

「本当にどうなるかな」

「本当に優しい人だったらいいけれど」

「僕達を大事にしてくれる人だったらね」

「粗末に扱われたら嫌だね」

「それはね」

「それは嫌なものでした。彼等も。」

「期待と不安が入り混じっています。それがはじまりでした。」

「鎖はコートにつけられ時計はそれでつながりました。男の人は何かあるとポケットから時計を出してです。その時間を見るのですでした。」

「時計はです。このことに満足して鎖に言います。」

「「こうして使ってもらってね」

「満足してる？」

「「うん、とてもね」

「「こうです。実際に満足している声で鎖にお話するのですでした。」

「「時間を見てもらってね」

「そうだね。それはね」

「君もかい？」

「うん、こうして立派なコートにつなげてもらってね
それでだということです。」

「僕は。幸せだよ」

「じゃあ僕と一緒にだね」

「そうだね。一緒にだね」

「このままずっとね」

「一緒にいられたらいいね」

こんなことをお話するのです。ところが。

ある日です。男の人のところにです。少し歳がいった紳士が来て
です。そうしてなのでした。

男の人が壁にかけているコートから時計と鎖を出してです。紳士
に言っのでした。

「これがなんですよ」

「ああ、これがその」

「はい、いい時計ですね」

「そうですね。鎖も」

紳士はこう言っています。時計と鎖を褒めるのでした。

第二章

「非常にいいものですね」

「そう思われますか。それでは」

「はい、では約束通り」

「どうぞ」

「有り難うございます」

時計と鎖は紳士のものになりました。そして今度はです。

紳士のお屋敷に入れられてです。一緒に壁にかけられました。今度はそうして壁にかけられたまま屋敷の人達に見られるようになったのです。

そのことにはです。彼等は。

時計がです。彼を壁に吊り下ろしている鎖に対して尋ねるのでした。

「今どんな気持ち？」

「どんなって？」

「コートにかけられてなくて。こうして僕を吊ってるのって。どうかな」

「どうかって言われたら」

「わからない？」

「何か違うね」

まずはこう言った鎖でした。

「コートにつけられてるのと」

「やっぱり違うんだ」

「これも鎖の仕事なんだなって」

「こうも言つのでした。」

「そう思つね」

「そうなんだ」

「君はどう？」

今度はです。鎖が時計に尋ねました。

「君は今皆に見られてるのって。どう思ってるのかな」

「そうだね。何か違うね」

時計もです。こんな感じで言うのでした。

「ほら、今までは御主人だけが見てたじゃない」

「そうだったね」

「それが今は皆に見られてるからね」

「それが違うよね」

「視線感じるよ、いつもね」

そうだといいのです。お屋敷は沢山の人達がいいます。その中にとです。その沢山の人達が見るのは当然のことでした。

「だから。前みたいだね」

「何かあったら見られるのじゃなくて」

「うん、いつも見られるのがね」

「違うんだね」

「全然違うよ。疲れるかな」

そしてです。時計はこんなことも言いました。

「視線を意識してね」

「疲れるんだ」

「君はどう？いつも僕を吊ってるけれど」

「少し疲れるかな」

鎖もです。それはということです。

「やっぱりね」

「そうなんだ。疲れるんだ君も」

「何となくだけれど」

「今は疲れるかなあ」

御互いにです。感じているのは同じでした。

こうしてコートにあった時とは違うものを感じていました。そして今度は。

夜中に紳士のお家に泥棒が入っています。そうして。

何を思ったのかです。時計と鎖を見てです。

「いいな、これ」

鎖と時計を手にとってでした。それを持ち去ったのです。時計と鎖は今度は泥棒のものになりました。その泥棒はというとです。

泥棒をするだけあってです。いい人ではありませんでした。

泥棒に出ていない時以外はいつも部屋でお酒を飲んで暴れていきます。そうしてしょっちゅうお家の人と喧嘩を繰り返していました。

時計と鎖はです。盗まれてここに来たことを忘れられてずっと箆笥の中に入れられたままでした。彼等はもう仕事をしていませんでした。

そのことです。彼等にとっては。

「何か今はね」

「嫌だよね」

「そうだね」

こうです。暗い箆笥の中でお話をするのでした。

第三章

「前は皆僕を見てくれたけれど」

「僕は何かにかけられていたけれど」

それでもなのでした。今は。

「こうして。ずっと暗い笹笥の中にいて」

「誰も見てくれないしかけてもくれないから」

「こんなの嫌だね」

「そうだね」

彼等はです。そのことが嫌でした。それでなのでした。

彼等で、です。さらにお話をします。

「ねえ、僕達ってね」

「このままずっとここににいるのかな」

「そうじゃないかな」

「そうかもね」

御互いにです。こう考えるのでした。

「このままこんなところで誰にも見られないで」

「何もかけられなくて」

「ずっといるのかな」

「この狭くて暗い場所で」

灯りは入りません。本当に真つ暗な場所です。

その中にずっといるかと思うとです。彼等は暗くならざるを得ま

せんでした。彼等はそのまま暗い気持ちで。笹笥の中にいました。

しかしです。やがて。笹笥の外が騒がしくなりました。

「一体何だよ」

「五月蠅い、大人しくしろ」

「もうわかってるんだ、御前のことはな」

怒鳴り合い掴み合う感じでした。

「御前が泥棒だっことはな」

「さあ、盗んだものは没収だ」

「警察に來い」

こう言つてです。誰かが捕まつた感じでした。

時計と鎖が置かれてある箆笥がです。開かれました。

「あれ、何かな」

「開いたけれど」

それに気付くとでした。光が久し振りに彼等を照らしました。

「眩しいね」

「久し振りの灯りだけれど」

「何、これ」

「一体どうしたのかな」

彼等が考えているとです。手に取られました。そうして。

話し声が聞こえました。見れば黒い制服の人達があれこれとお話しています。

「この時計と鎖もか」

「そうみたいだな。盗品だろうな」

「じゃあ持ち主を調べて」

「返すか」

「そうするか」

こうお話するのが聞こえました。そして彼等は。

あの屋敷に戻つたのでした。紳士に手に取られてです。笑顔で言われました。

「また戻つて来るなんて思わなかつたよ」

「あつ、御主人だ」

「いたんだ」

こうです。時計と鎖もその紳士を見て言います。紳士は前と全く変わらない。穏やかでしかも気品のある顔を彼等に見せています。

その紳士は笑顔で、です。彼等を元の場所にかけました。あの壁にです。

「さあ、ここにいてくれよ」

「あつ、僕達完全にね」

「戻れたんだね」

彼等もここでわかりました。そのことが。

「よかった、ずっとあの暗い場所にいるのかつて思ったけれど」

「戻つて来られたんだ」

「また皆に見てもらえるんだ」

「こうしてかけてもらえるんだ」

彼等にはそのことがとても嬉しかったのです。こうして彼等はまた壁にかけてもらいました。

それから長い年月が経ちました。やがて。

お屋敷にです。何かいつも勉強しているような人が来てです。時計と鎖のご主人である紳士に対してです。こう言うのでした。

第四章

「いや、この時計と鎖は」

「如何でしょうか」

「価値があります」

「こうです。紳士に対して言うのでした。」

「どちらも。まだ年季は入っていませんが」

「いいものですか」

「こちらで飾るに値します」

「そうだというのです。」

「充分にです」

「では。宜しいですか」

「はい、是非共こちらに置かさせて下さい」

その人は自分から申し出ました。

「お金は出しますので」

「わかりました。それでは」

「こうしてです。そのうえで、です。」

時計と鎖は今度はその人に手に取られました。そうして次に来た場所は。

背に壁があるガラスのケースの中でした。鎖はその中の壁にかけられ時計も吊るされます。周りには彼等のある場所の他にもウィンドウがあり彼等の他の時計や鎖もあります。そういった場所を見てです。

時計と鎖はです。ここが何処なのかお話するのでした。

「何か今までの場所と違うね」

「そうだね。何かね」

彼等もそれはわかりました。

「どうした場所かな」

「僕たちの他にも色々な時計や鎖があるけれど」

「ここつて一体」

「何処なのかな」

「博物館だよ」

彼等の隣にいる大きな木製の、古そうな時計が彼等に言ってきた。その古い時計もウィンドウの中に入れられています。

「ここはね。博物館なんだ」

「博物館？」

「博物館つて？」

「うん、大切なものが置かれてね」

まずはです。そうした場所だということです。

「それで色々な人達がそうしたものを見て勉強する場所なんだよ」

「それが博物館なんだ」

「そうなんだ」

「そうだよ。君達はそこに来たんだよ」

彼等にです。こう説明するのです。

「大切なものとしてね」

「僕達つてそうなのかな」

「大切なものなのかな」

「大切だよ。だつてね」

「だつて？」

「だつてつて？」

「いつも。誰かの為に働いているじゃないか」

それでだということです。時計も鎖も大切なものだということです。

「鎖君はかけられて。何かを吊るすね」

「はい、時計君を」

まずはです。鎖なのでした。鎖も古い時計の言葉に頷きます。

「いつもかけてもらって吊るしています」

「そうだね。そして懐中時計君はね」

「今度は僕です」

「そう、君はね」

彼はです。どうかというのです。

「いつも皆に時間を見せていますね」

「はい、時計ですから」

だからだと。彼は言いました。

「そうしています」

「そう、どちらも誰かの為に働いているね」

そうしているということは。どうかというのです。

「それをしてるから。大切なものなんだよ」

「だからですか」

「ここにですか」

「人間さん達は君達の外見がいいからここに入れたんだろうけれど」

古い時計はです。それとは別にです。彼等の価値を見出してお話するのでした。

「違うんだよ。君達は誰かの為に働いているから大切なんだよ」

「僕は皆に時間を見せて」

「僕はその時計君を吊るして支えて」

「そうして働いているから価値があるんだよ」

古い時計はこう彼等に話します。

「だから。ここにいるんだよ」

「そうなんですか。じゃあ僕達は」

「ここでずっと働いてですね」

「うん、そうするんだよ」

古い時計は暖かい声で彼等に言いました。

「それがわかったね」

「はい、よく」

「わかりました」

明るい声で応える時計と鎖でした。そうしてです。

彼等はその博物館で何時までも一緒にいました。時計は時間を自分を見る人達に見せて、鎖はその時計を吊るして。そうして何時までも大切な仕事をしたのでした。

時計と鎖のお話

完

2
0
1
1
・
3
・
6

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5933u/>

時計と鎖のお話

2011年7月4日03時17分発行